

一人で演じる日本語会話：小噺プロジェクトの実践報告  
Conversation performed by a single person:  
a report from a *kobanashi* project

畑佐一味  
Kazumi Hatasa  
Purdue University  
The Japanese School of Middlebury College

久保田佐由利  
Sayuri Kubota  
Eastern Michigan University

## 1. はじめに

「落語」は日本の伝統的な大衆芸能の一つであるが、本質的に「話芸」であることから、歌舞伎、文楽、能などに比較して、日本語さらに日本語学習にも極めて近いところに位置づけることができる。しかし、日本語学習者の間での知名度は他の伝統芸能に比べてかなり低い。(Braun, 2008) 日本語教育の中では、「落語」は読み物としての取り上げられたり、日本文化の教材としての取り上げられたりすることが多い。学習者が落語を覚え、それをクラスや学内の催しで発表するという活動も報告されているが、その数は極めて限られている。(Nittono, 2009) 本研究は、初級者でも扱える短い小噺を学生に演じさせるという発想を出発点にしている点で従来の指導法とは異なる新しい試みであると言える。(「小噺」とは落語家が本編に入る前にウォーミングアップとして使う短い冗談話のことを指す。)

ここで紹介する小噺プロジェクトは米国ミドルベリー大学夏期日本語学校(注1)で、2006年より毎年、落語家(柳家さん喬・柳亭左龍)を招いて、落語を紹介するという活動の延長線上に位置づけられ、2007年に小噺を日本語学習者にさせるという活動を行ったことがきっかけとなった。当初はどのような結果が期待されるか分からず、暗中模索状態であったが、参加した学生からの評価は大変高かったため、次年度も継続した。代表的な自由記述には以下のようなものが見られた(原文は英語)。

- ・自分の発音のあいまいさに気づいた。
- ・お客さんが分かってくれて笑ってくれるようにするために一生懸命練習した。
- ・友達と練習する過程で自分の問題にも気づくことができた。
- ・友達と面白くするための工夫について話し合うことができた。
- ・コミュニケーションには動作も重要だということが分かった。
- ・プロの落語家の技術はすごいと思った。
- ・高座に上がったり、正座をしたり、実際にやってみることが勉強になった。
- ・日本へ行ったら「寄席」に行ってみたい。

- ・ホストファミリーに披露したい。

このように、小噺を演じることへの取り組みが学生の自律的学習や協働学習に貢献し、文化といえは「漫画・アニメ・すし・カラオケ」に代表される現代日本文化のイメージから脱却し、幅広い日本文化への理解を導く活動であったことが示唆された。言語の四技能を上達させるとともに体験を通じた日本文化理解を促進するという点で、本プロジェクトは文化と言語教育を統合した日本語教育と捉えることができる。

現在、本プロジェクトはプロの落語家、あるいは、落語に精通した日本語教師がいなくても同様の活動が実現できるような環境作りの構築を目指している。そのために、現在構築中のウェブサイトでは学生が小噺を覚えてから発表できるようになるまでの過程を録画し、その変化が見られるようにしてある。また、途中経過でのプロからのアドバイスや教師からのアドバイス、そして学生同士のディスカッションなどもなるべくたくさん収録した。プロジェクトは現在も進行中であり、今後、プロのお手本画像や他の学習者の例などを順次追加していく予定である。

## 2. 日本語学習に小噺を取り入れる理由

以下に、小噺を日本語学習に取り入れることにした理由を述べる。まず、小噺はごく短い話なので、初級の学習者でも十分記憶することができ、学生への負担が軽い。しかし、小噺には母語話者である聞き手を笑わせるというはっきりとした目的があり、完結している。したがって、上手に出来れば聞き手は、お世辞ではなく、本当に笑ってくれるという明確なゴールを学生に示すことができる。

ただ短いと言っても、文脈なしでいきなり話を始め、それを完結させ、聞き手に無理なく理解させるためには、発音や台詞の間（ま）といった言語的な正確さが要求される。

また、練習を繰り返すなかでの試行錯誤から、言語に対する創造性を発揮し、話に手を加える学生も出てくる。そして、学生間での話し合いの中から新しいやり方も生まれてくる。話し合いが日本語で行われれば、それ自体言語の練習をしていることになる。

これから留学を控えている学生にとっては、日本に行った時に友達やホストファミリーに披露できる隠し芸として小噺を利用することができる。

## 3. 学生が小噺を発表するまでの流れ

### 3.1 題材の選択

インターネット上の小噺サイトなどを利用して、学生に小噺を選ばせる。この時、学生は文字情報を読んで、「面白い」「面白くない」を判断しがちであるが、小噺は演じ方でどちらにでもなるので、あまり話の内容自体に注意を向けなくて

もいいという指導を行う必要がある。はじめはなるべく短い物を選ばせた方がいい。

### 3.2 話の暗記

小噺を覚えるための第一段階は暗記である。途中で「あのう」などのよどみの言葉が出なくなるまで、完全に覚える必要がある。暗記を嫌う中上級の学生には内容の理解をよりどころにして、小噺をしようとする者が出てくるが、これは効果的な笑いに繋がらない。言葉は考えなくても自動的にすらすら出てくるレベルまで覚えてしまう必要がある。

### 3.3 反復練習

台詞を覚えたら、次は発音と間の練習を行う。ここで、台詞を完全に覚えていないと学生の注意は発音や間に向かないので、暗記ができていることが前提条件となる。少しずつ、余裕が出てきたら、目線、仕草など非言語的な部分にも注意をはらうように指導していく。

### 3.4 発表

人前で演じる。できれば、普段顔を合わせないお客さんの前でやらせた方が緊張感が高くなる。いわゆる身内で行うスキットとは違い、本当のお客さんを笑わせることが目的であるから、見知らぬ日本人の前で披露するという場は欠かせない。学生は緊張するが、小噺活動から人の前で発表するという要素を削除すると、学生の達成感は半減すると考えている。（もちろん、無理強いしてやらせる必要はないが。）

## 4. 2007年と2008年夏の活動での学生からのフィードバック

2007年と2008年の小噺活動の後で行ったアンケートに現れたフィードバックには以下のようなものが見られた。

- 発音の大切さに気づいた。
- 他の言い方について積極的に考えた。
- 自分の噺を作った。
- 練習を通して、他の学生達と意見を交換した。
- 座布団に座る、お辞儀をするといった行動を本当に必要な行為として体験した。
- 寄席などの伝統文化をより身近に感じることができるようになった。

## 5. 小噺活動を他校に広めていくためのウェブサイト

「日本語学習者による落語の小噺」サイトはプロの落語家や落語に詳しい日本語教員がいなくても上記のような活動を可能にするための支援サイトである。

<http://tell.fll.purdue.edu/hatasa/rakugo/rakugobystudents.html>

このサイトは、次のような情報を提供している。

1. 小噺を見つけるためのリンク集
2. 落語一般の知識をえるためのリンク集
3. 座布団の座り方のデモンストレーション
4. 出囃子の音源
5. 学習者の実践例、プロによるお手本ビデオ、そして学習者の練習風景を記録したビデオ

このサイトは誰でも自由に使えるようにしてあるので、是非お試しください。

## 6. イースタンミシガン大学での取り組み

上記の「日本語学習者による落語の小噺」サイトにある情報を使い、2008年秋学期にイースタンミシガン大学の日本語のコースで小噺プロジェクトを行って見た。

### 6.1 コースについて

小噺プロジェクトを行ったコースは「げんき II」(Banno, et al., 1999)の17課から20課までを履修するコースで、75分の授業を週に2度、15週間行うコースである。2つのセクションがあり、学生数はセクション1が15人、セクション2が8人の合計32人で、そのうち、落語や小噺のことを知っていた学生は6人だけであった。

### 6.2 プロジェクトのスケジュール

#### 4週目：落語／小噺の紹介

落語や小噺の存在を知らない学生がほとんどだったので、4週目に、75分の授業時間を使って、落語と小噺について紹介をした。

- (1) 宿題として、落語についての小論文(Oshima, 2006)を読んでこさせる。
- (2) 柳亭左龍師が英語で演じた小噺のビデオ(YouTube)を見せる。
- (3) ウェブサイトに掲載されている学生の実践例を見せる。
- (4) 小道具(座布団、扇子、手拭、出囃子)を紹介する。
- (5) ウェブサイトから選んだ小噺を教師が実演してみせる。(付録A)
- (6) 教師が実演した小噺の例をクラス全体で練習してから、3～4人のグループに分かれてさらに練習する。

#### 7週目：クラスで練習

75分の授業時間を使って、小噺の練習をさせる。4週目に紹介した小噺に加えて、いくつか新しい小噺も紹介した。始めは3～4人のグループで練習させ、その間に、一人ずつ教師のところに来させて、座布団の座り方、お辞儀の仕方、終わった後の座布団の返し方などを指導した。最後に、クラス全員の前で演じさせ、教師やクラスメートからアドバイスをもらった。(プロの落語家が、座り方を説

明したり、学生の演技指導をしているビデオがウェブサイトにあるので、授業の前に見ておくと参考になる。) これらの小噺を学生がクラス外で練習する時に、発音や間の取り方の参考になるように、教師が録音したモデル音声をダウンロードできるようにした。

#### 9週目：自作小噺ドラフト1

自作の小噺を書いてドラフトを提出する。アイデアが浮かばない学生は、既成の作品をもとにしても、英語のジョークを翻訳してもいいことにした。

#### 11週目：自作小噺ドラフト2

教師のコメントをもとに書き直した最終ドラフトを提出する(付録B)。自宅練習用に自作小噺も録音してモデル音声のファイルを作成した。

#### 12週目と13週目：オフィスアワーに練習

期末の発表会で演じる2つの小噺を教員のオフィスアワーを利用して練習した。

#### 14週目：オフィスアワーに練習＋クラスでリハーサル

オフィスアワーの練習に加え、授業の時間に発表会のリハーサルをした。

#### 15週目：発表会

日本人留学生や他のコースの日本語の教員を招いて、小噺を2つずつ披露した。

### 6.3 学生からのフィードバック

学期末にこのプロジェクトについてアンケートをさせた。回答があった21人のうち、19人が小噺をするのは楽しかった／おもしろかったと言っており、大変ではあったようだがプロジェクトは好評だったと言えよう。(フィードバックの例 “It was challenging, but...”, “It was difficult, but...”, “It was nerve wrecking, but...”, “It made me very nervous, but...”) その他にアンケートに現れたフィードバックには以下のようなものも見られた。(原文は英語)

- ・ 人前で日本語で話すのが怖くなくなった。
- ・ 人前で話すことに自信が持てるようになった。
- ・ 発音の大切さを認識した。
- ・ 発音や流暢さを楽しく練習できる活動だった。
- ・ 日本のコメディを知るいい機会になった。
- ・ 文法や言葉だけでなく、文化も学べた。
- ・ クラスの雰囲気をもっと明るくするのに最高の方法。

### 6.4 反省点

授業中に練習した時、3～4人のグループやクラス全体で、お互いに意見を交換しあう機会を与えたが、教師が思いつかないようなおもしろい意見もたくさん

出たりして、楽しい雰囲気でも活動が進んだ。このような機会をもっと増やしてもよかったかもしれない。また、今回はオフィスアワーを使っただけの練習は、教師と学生の一対一の練習となり、学生もかなり緊張していた。これも数人のグループで練習に来させるたほうがより効果的かもしれない。

授業の関係で、4週目にプロジェクトを導入した後、本格的な練習に入ったのが7週目で、さらに自作の小噺を書くという作業もさせたので、学期の後半に負担が多くなりすぎてしまった。小噺プロジェクトを初級のクラスで行う場合や、あまり授業時間をプロジェクトに使えない場合は、自作の小噺を書かせるタスクはオプションにして、まずは演じる・楽しむ・文化を学ぶことに集中した方が無理がないだろう。

自作の小噺を書く、英語のジョークを小噺風に翻訳する等の活動をさせる場合は、授業中にもっとしっかり前作業をするべきだった。授業時間の関係で、書く作業について、クラス内で充分時間がとれなかったせいか、なかなかアイデアが浮かばない学生も多かった。また、英語ではおもしろくても、日本語にすると分かりにくい、又は全然おもしろくならない作品を書いてきた学生も数人いた。日本語にすると分かりにくい翻訳例(付録C)を提示したり、短いストーリーを読ませて、それをもとに小噺を作ってみるといった作業を教室内ですれば、このような問題はある程度回避できるであろう。

以上の反省点をもとに、今後も小噺を日本語の授業に取り入れていく試みを続けていってみたいと思う。学生のアンケートの回答の中に、”IT WAS FUN. A LOT OF WORK. BUT OVERALL VERY REWARDING.”というのがあったが、教師側からも同じことが言える活動であった。

## 7. おわりに

本プロジェクトはまだまだ始まったばかりで、反省点、解決すべき問題もたくさんある。しかし、これまで学習者が楽しいと感じていることは明らかであり、それ自体大変有意義であり、有り難い。

また、このような活動が言語の習得、特定の言語技能の中長期的な上達に繋がっているかを第二言語習得の見地から検証していく必要があるであろう。そうすることで、単なる授業中の息抜きに終わるのではなく、「言語学習的に意味がある面白い活動」としての位置づけが確立できよう。

将来的には、「日本語学習者による小噺コンテスト」の実施を計画している。コンテストの規模は、学内コンテストのような小さいものから全世界レベルの大きなものまで可能である。小規模のコンテストは従来のスピーチコンテストのような形で行えるが、ITを利用すれば、大規模なコンテストでもコストを低く抑えて実施できる。例えば、無料動画投稿サイトのサービス(例 You Tube)を利用して、応募者に小噺を演じているビデオを投稿させ、それを審査するということが可能である。そして、投稿されてくる小噺を「古典」、「改編・改作」、

「自作」などに分類すれば、パフォーマンスだけでなく、学習者が創作した内容に関する評価もできるようになる。従って、コンテストを行うことで、異なった文化を反映した新しい小噺を学習者が落語のスタイルを使って披露するという活動が実現する。そして、それは日本語学習の促進、日本文化の海外発信、さらに、ユーモアを通して見る異文化コミュニケーション（文化リテラシー教育）、という三つの観点から、興味深いものになることが期待できる。

演劇技法を外国語の授業に取り入れようとする場合、活動に必要な時間の捻出がしばしば問題にされる。それが内容的に詰まっている大学での日本語のカリキュラムのような場合はなおさらであろう。本プロジェクトは小噺という手軽な材料を利用した。そして、それが多くの教師の方達に「小噺は手軽」という印象を与え、教室での活動の一部として採用されていくことを期待するものである。

最後に、薄謝にも関わらずバーモントまで足を運んでくださり、この一連の活動を可能にしてくださった、柳家さん喬師と柳亭左龍師に心からお礼申し上げます。

#### 参考文献

Banno, E., et al. 1999. *An Integrated Course in Elementary Japanese: Genki II*. Tokyo: The Japan Times.

Brau, Lorie. 2008 *RAKUGO*. New York: Lexington Books.

Nittono, M. 2009. “We’re doing traditional rakugo!: Striving towards acquiring the ‘five’ skills through performing rakugo” Princeton Japanese Pedagogy Forum, 2009.

Oshima, K. 2006. ‘Rakugo and Humor in Japanese Interpersonal Communication.’ in J. Davis (ed.). *Understanding Humor in Japan*. Detroit: Wayne State University Press.

(An earlier version of this article is available at [http://www.english-rakugo.com/english\\_version/english\\_what.html](http://www.english-rakugo.com/english_version/english_what.html).)

## 付録A

小噺の例：「どうもちばらくです」の新作小噺集から  
<http://tibaraku.web.fc2.com/kobanasi/sinhome.html>

### 4週目に紹介した小噺

#### 手術

患者：先生、私、手術するの、初めてなんですけど、大丈夫でしょうか。  
医者：心配することはありません、私だって、手術するの初めてなんですから。

#### 整形手術

主婦A：お隣の奥さん交通事故に遭われて、顔を怪我されたんですって。  
主婦B：まあ、お気の毒に。  
主婦A：でも、整形手術で元の顔に戻ったんですって。  
主婦B：まあ、お気の毒に。

#### 名画 ある美術館での会話

客： あら～すてきな絵ですこと。ルノワールですわね。  
係員：いいえ奥様、それはダビンチでございます。  
客： あ～らこちらもすてき、ダビンチですわね。  
係員：いいえ奥様、それがルノワールでございます。  
客： あら、この絵なら私にもわかるわ。ピカソよね。  
係員：いいえ奥様、それは鏡でございます。

### 7週目に紹介した小噺

#### 本

A：本は好きですか。  
B：はい、本は大好きです。  
A：ロミオとジュリエットはお読みになりましたか。  
B：はい、ロミオは読みましたが、ジュリエットはまだです。

#### 神様

学生：ああ、こまった。。。明日は難しい日本語の試験がある。どうしよう。  
(An idea flashed through student's mind.)  
学生：神様、どうか私の日本語を上手にしてください。  
神様：何でもするか。  
学生：はい、何でもします。  
神様：じゃあ、勉強しろ。



## タバコ

on the street

A：あのう、一本もらえますか。

B：あ、タバコ、すいますか。

A：あ、すいません。

B：ああ、すわないんですか。

## 冷蔵庫

店員：奥様、ご注文の冷蔵庫、お届けにまいりました。

主婦：わあ。

あら、店員さん、これ注文した冷蔵庫と違うわ。

店員：いえ、同じですよ。

主婦：違うわよ。

店員：同じですよ。

主婦：違うわよ。だって、カタログには肉や野菜が入っていたわよ。

## 付録 B

学生が作ったオリジナル小噺

### 先生の顔

学生：先生、私が書いた絵を見て下さい。

先生：はい。ん、ちょっとへんな顔ですね。誰ですか。

学生：先生のかおですよ。

先生：えっー！ぜんぜん私の顔みたじゃないですよ。私の顔をよく見て  
ください。

学生：ああ、そうですね。本当の顔はもっとへんですね。

### 地理の勉強

先生： こんにちは、みなさん。今日は、アメリカの地理を勉強します。  
じゃ、地図を見ましょう。この地図は、世界地図ですね。  
ケンさん、アメリカは、どこにあるか分かりますか。

ケンさん： はい、アメリカは、カナダの下にあります。

先生： ピン・ポン！ところで、メアリーさん、アメリカはだれが発見したか  
知っていますか。

メアリーさん： はい、ケンさんですよ！

先生： えっ???

### 病院で

ここは病院です。

医者： 次の方，お入りください。

患者： 先生。たすけて。みんなが僕をむしるんです。ぼくはみんなと  
話したいけど、だれも答えてくれないんです。先生。たすけてください。

医者： (looks around with a confused face) 次の方，お入りください。

### 便利なもの

A: とてもべんりなものをもらいました。ご飯を作ってくれて、そうじをして  
くれて、せんたくをしてくれて、買い物もしてくれます。

B: わあ、うらやましい！それ、どこで買えますか？

A: それは、買えません。私の主人ですから。

### 有名人

ここはハリウッドです。有名人がたくさんいます。

ああ！ブラド・ピット様です！わあ、本をお読みになっています！すてき！

あれはジョニー・デップ様です！わあ、おわらいになっています！かっこいい！

あ。ブリットニー・スピアス様です。おはげになっていらっしやいます。。。

### お蔭様で

先生：まあ、ロバートさん、ひさしぶり。元気ですか。

ロバート：(act like character hates the teacher, look around, ignore a little) 元気じゃないよ。

先生：(looks and sounds unhappy) ロバートさん、しつれいですよ。

私はあなたの先生ですよ。「おかげさまで」と言わなくちゃいけませんよ。

ロバート：おかげさまで、卒業できないんだよ。

### パーフェクトな男の人

A: どんな男の人と結婚したい？

B: そうね... 背が高く、親切で、ハンサムで、お金持ちで、料理が上手で、そうじとせんたくが大好きな人と結婚したい！

A: へえ... 理想が高いのね。

B: じゃあ、あなたは、どんな男の人と結婚したいの？

A: そうね。明るくて、毎晩、家にいてくれる人。

B: えっ、それだけ??? じゃあ、テレビを買ったらどう？

### ワイヤレス・ルーター

今、おばさんはテクニカルサポートに電話をしています。

リンリンリン

T: はい、テクニカル・サポートです。

おばさん：もしもし、あのう、ワイヤレス・ルーターを買ったんですが、インターネットが使えないんです。

T: そうですか。コンピューターはついてますか。

おばさん：はい、ついてます。

T: そうですか。じゃあ、インターネットのケーブルはワイヤレス・ルーターにつながっていますか。

おばさん：いいえ、もちろんつながっていないわよ。だって、これ、ワイヤレスでしょ！

### 心臓麻痺

道で

人1：誰かたすけて！私の友だちがしんぞうまひを起こしているんです。

人2：大丈夫です。私がたすけてあげましょう。

人1：ああ！よかったです！あなたはお医者様ですか。

人2：いいえ。でも、いつも ER を見ているから、大丈夫です。

## 付録 C

英語のコメディの一部を翻訳したが、日本語版では分かりにくい作品の一例

野球場で

A:あの一塁にいる人は誰。 Costello: Well then who's on first?

B:うん。 Abbott: Yes.

A:名前は? Costello: I mean the fellow's name.

B:誰。 Abbott: Who.

A:一塁にいる人だよ。 Costello: The first baseman.

B:誰。 Abbott: Who.

A:あの一塁にいる。。。 Costello: The first baseman.

B:一塁にいるのは誰だよ。 Abbott: Who is on first!

A:知らないよ。

だから聞いているんだ。 Costello: I'm asking YOU who's on first.

B:彼の名前は誰だよ。 Abbott: That's the man's name.

A:???